

【 玖 珠 町 】

令和4年度 全国学力・学習状況調査結果（小学校：国語）

1 調査結果の分析

小学校：国語

- 平均正答率は、66%であり、県66%及び全国66%と同レベルである。
- 低学力層（正答率20%以下）の児童の割合が3.0%（県：5.2%，全国：6.6%）と少ない。
- 正答率50%未満（7問）の割合は、29.8%（県：27.9%，全国：28.3%）であり、本町の学力向上に係る数値目標の一つである「学力調査において正答率50%未満の児童の割合を10%未満にする」は達成できなかった。
- 正答率80%（11問）以上の上位層の割合は42.7%（県：39.9%，全国：41.2%）と全国平均より高い。
- 設問別正答率は、14問中7問が全国平均を上回る。
- 問題点を踏まえて、解決方法を記述する問題の正答率は44.6%で、全国平均47.7%より低い数値であった。記述の条件である「話し合いの様子の一部」から言葉や文を取り上げて書くことはできているが、問題点や解決方法が書かれていない解答が42.6%（全国:36.1%）と多かった。

2 具体的な改善方策

小学校：国語

- ① 「新大分スタンダード」に基づく授業観察シートを活用した管理職の授業観察の実施
 - ・ 授業デザイン力の向上（単元構想力）
 - ・ 育成を目指す資質・能力と連動した評価規準の設定
- ② 国語科の授業における系統的な指導を充実させる。
- ③ 国語科の授業だけでなく、学校挙げて組織的に取り組む体制をつくり、継続的に取り組む。
- ④ 各校に配置している新聞等を活用して、表現の違いによる読み手の受け取り方の違いを実感させる学習活動を仕組む。
- ⑤ 「読解力」の充実に向けて、学校司書と連携して読書習慣の定着を図る。
- ⑥ デジタル教材の効果的かつ積極的な活用を図る（補充学習や chromebook の持ち帰り学習）

令和4年度 全国学力・学習状況調査結果（小学校：算数）

1 調査結果の分析

小学校：算数

- 平均正答率は、68%であり、県64%及び全国63%を上回っている。
- 低学力層（正答率20%以下）の児童の割合が1.0%（県：4.6%、全国：5.7%）と少ない。
- 正答率50%未満（8問）の割合は、25.8%（県：29.6%、全国：30.7%）と全国値より少ないが、本町の学力向上に係る数値目標の一つである「学力調査において正答率50%未満の児童の割合を10%未満にする」は達成できなかった。
- 正答率80%（13問）以上の上位層の割合は34.7%（県：30.5%、全国：30.2%）であり、全国平均より4.5ポイント高い。
- 設問別正答率は、16問中14問が全国平均を上回る。
- 初出題のプログラミングやひげ図の読み取りなど4問題についての正答率は、すべて全国平均を上回った。

2 具体的な改善方策

小学校：算数

- ① 「新大分スタンダード」に基づく授業観察シートを活用した管理職の授業観察の実施
 - ・ 授業デザイン力の向上（単元構想力）
 - ・ 育成を目指す資質・能力と連動した評価規準の設定
- ② 町独自で実施している算数確認テスト（年4回）に向けた継続的な取組及びその結果を生かした補充学習の充実を図る。
- ③ 町確認テスト問題データベース（町内共有）の活用で定着を図る。
- ④ デジタル教材の効果的かつ積極的な活用を図る（補充学習やchromebookの持ち帰り学習）
- ⑤ chromebook及びその他のICT機器の積極的な活用を活かして、各学校の取組を共有化していく。

令和4年度 全国学力・学習状況調査結果（小学校：理科）

1 調査結果の分析

小学校：理科

- 平均正答率は、66%であり、県64%及び全国63%を上回っている。
- 低学力層（正答率20%以下）の児童の割合が2.9%（県：4.2%，全国：4.8%）と少ない。
- 正答率50%未満（8問）の割合は、22.0%（県：26.1%，全国：27.2%）と全国値より少ないが、本町の学力向上に係る数値目標の一つである「学力調査において正答率50%未満の児童の割合を10%未満にする」は達成できなかった。
- 正答率80%（13問）以上の上位層の割合は49.0%（県：40.1%，全国：39.6%）であり、全国平均より9.4ポイント高くなっている。また、全問正解者が全国の1.8%に対して、本町では5.8%と高い。
- 設問別正答率は、17問中13問が全国平均を上回る。
- メスシリンダーの名称や測定方法など基本的な知識や技能を問う問題の正答率は、全国平均67.8%を大きく上回っている。
- 気づいたことを分析・解釈する能力を測る初出題の「問題の見いだし」が課題となる。

2 具体的な改善方策

小学校：理科

- ① 「新大分スタンダード」に基づく授業観察シートを活用した管理職の授業観察の実施
・ 授業デザイン力の向上（単元構想力）
・ 育成を目指す資質・能力と連動した評価規準の設定
- ② 町内に配置されている教科担任制推進教員（理科）の授業における好事例を町内でデータベースとして共有する。
- ③ デジタル教材の効果的かつ積極的な活用を図る（補充学習やchromebookの持ち帰り学習）
- ④ 実験・観察などの実体験を重視するとともに、chromebook及びその他のICT機器の積極的な活用を活かして、各学校の取組を共有化していく。

令和4年度 全国学力・学習状況調査結果（中学校：国語）

1 調査結果の分析

中学校：国語

- 平均正答率は、71%であり、県69%及び全国69%を上回っている
- 低学力層の生徒の割合（正答率20%以下）は全国平均より少なく、2%（全国：4.2%）である。
- 正答率50%以下の生徒の割合は、9.7%（全国：15.0%）である。全国値より低く、本町の学力向上に係る数値目標の一つである「学力調査において正答率50%未満の児童の割合を10%未満にする」を達成できた。
- 正答率80%以上（11問以上）の上位層は、48.6%であり、全国値46.4%を上回る。
- すべての領域と観点で全国平均を上回る。特に、領域「情報の扱いに関する事項」と「書くこと」、「話すこと・聞くこと」は、全国平均を6ポイント以上上回っている。
- 設問別正答率は、14問中9問が全国平均を上回っている。
- 自分の考えがわかりやすく伝わるように表現を工夫して話すことができるかをみる問題の正答率は、66.7%で全国平均51.7%を15ポイント上回っている。また、無解答率も6.7%（全国：16.2%）と低い。

2 具体的な改善方策

中学校：国語

- 1 更なる基礎力の定着・向上のために
 - ① 授業におけるねらいの設定において、ICTの活用を含めて「考えるための技法」を意識して設定をする。
 - ② 学校挙げて「読む・書く」基礎技能（正確に読む・速く正確に書く等）の習熟を図る取組を引き続き継続する。
 - ③ 読解力の充実に向けて、学校司書と連携し組織的に読書習慣の定着を図る。（朝読書の充実）
 - ④ 問題データベースをさまざまな場面で活用する。
 - ⑤ AIドリル「すらら」を活用して基礎的事項の定着を図る。
 - ⑥ 教科部会を開催し、指導方法の交流を図る。
- 2 漢字や語句の定着のために
 - ① 国語科の授業における系統的な指導を充実させる。
 - ② 国語科の授業だけでなく、学校挙げて組織的に取り組む体制をつくり、継続的に取り組む。
 - ③ 漢字・語句に対する興味・関心を引き出し、伸ばす言語環境づくりに力を注ぐ。

令和4年度 全国学力・学習状況調査結果（中学校：数学）

1 調査結果の分析

中学校：数学

- 平均正答率は49%であり、県平均52%及び全国平均51%を下回った。
- 低学力層の生徒の割合（正答率20%以下）は全国平均（19.0%）より少なく、18.1%である。
- 正答率50%以下の生徒の割合は、53.4%（全国：50.8%）と多い。
- 設問別正答率は、14問中3問が全国平均を上回ったのみである。「図形」で全国値と-4.6ポイント、「データの活用」では、-5ポイントの差がある。
- 基本的な問題「素因数分解」の正答率は80.0%と全国平均52.2%を大きく上回っている。また、グラフ上の座標を求める基本的な問題の正答率も61.9%（全国：54.6%）と高い。
- 初出題のデータの分析を示した「ひげ図」の読み取りの正答率は34.3%で、全国平均44.1%に対して約10ポイント低くなっている。

2 具体的な改善方策

中学校：数学

- 1 更なる基礎力の定着・向上のために
 - ① 指導事項を明確にした授業づくりを徹底する。
 - ② 町独自で実施している数学確認テスト（年4回）に向けた継続的な取組及びその結果を生かした補充学習の充実を図る。
 - ③ 問題データベースを活用する。
 - ④ AIドリル「すらら」を活用して基礎的事項の定着を図る。（持ち帰り学習課題）
 - ⑤ 定期テストを単元テストに変更し、その単元で身につけるべき事の定着を徹底させる。
- 2 正答率50%未満の層を減らすために
 - ① 授業形態の工夫やドリルタイム等を通して、個別指導の充実を図る。
 - ② 町独自で実施している数学確認テスト（年4回）に向けた取組及びその結果を生かした補充学習の充実を図る。
 - ③ 町確認テスト問題データベース（町内共有）の活用で定着を図る。
 - ④ 教科部会を開催し、指導方法の交流を実施する。
 - ⑤ 小学校からの円滑な接続を図るため、校種間連携協議会を開催し小学校との連携を強化する。

令和4年度 全国学力・学習状況調査結果（中学校：理科）

1 調査結果の分析

中学校：理科

- 平均正答率は49%であり、県平均49%及び全国平均49%と同レベルである。
- 低学力層の生徒の割合（正答率20%以下）は全国平均（7.9%）より少なく、7.5%である。
- 正答率50%以下の生徒の割合は、47.2%（全国：51.5%）である。全国値より少ないが、本町の目標を達成できていない。
- 正答率80%以上（17問以上）の上位層は、2.8%であり、全国値7.4%より少ない。
- 設問別正答率は、21問中11問が全国平均を上回る。
- タブレット端末のタッチパネルの反応に関する問題の正答率は、85.8%（全国：78.5%）と高い。全体として、知識を日常生活や他の場面とつなげて考える力を問う問題の正答率が低い傾向にある。知識を日常と関連付けて活用することが今後の課題となる。

2 具体的な改善方策

中学校：理科

- 1 更なる基礎力の定着・向上のために
 - ① 理科においては、領域によって定着度の差が大きい。定着できていない単元や内容を明確にし、それを補っていく取り組みをすることで、指導事項を明確にした授業の更なる充実を図る。
 - ② 授業において、知識を日常生活や他の場面とつなげて考えさせる場面を取り入れる。
 - ③ 問題データベースを活用する。
 - ④ AIドリル「すらら」を活用して基礎的事項の定着を図る。
 - ⑤ Chromebook はもとより、電子黒板や拡大提示装置などの ICT 機器を場面に応じて効果的に活用する。
- 2 正答率50%未満の層を減らすために
 - ① 協働的な学習（少人数による観察実験や教え合い、意見交換など）を充実させ、実験事実や観察結果、図や表から読み取ったことを言語化し、ICT を利活用したアウトプットによる考察、説明を行う学習指導の実施。
 - ② 自然の事物・現象の観察などを通して、「何のために、何を求めて」観察・実験を行うのかという目的意識を常に持たせた授業づくりに取り組む。
 - ③ 町確認テスト問題データベース（町内共有）の活用で定着を図る。

【 玖 珠 町 】

令和4年度 全国学力・学習状況調査結果（児童・生徒質問紙）

1 調査結果の概要

児童質問紙

【基本的生活習慣・自尊感情等に関すること】

- 「将来の夢や目標を持っていますか」に対して 86.5%が肯定的回答をしている。(全国は 79.8%)
- 学校に行くのは楽しいと肯定的に回答している児童は 86.5%で全国平均より 1.1%高い。
- いじめはどんな理由があってもいけないと肯定的に回答した児童は、99.1%（全国は 96.8%）
- 地域行事に参加していると肯定的に回答した児童は、58.7%で全国平均より 6.0%高い。

【学習習慣・授業等に関すること】

- 家で計画を立てて勉強している児童は、80.8%で全国平均より 9.7%高い。
- 読書は好きであると肯定的に回答した児童は、80.8%で全国平均より 7.7%高い。
- 学習の中で I C T機器を使うのは勉強の役に立つと肯定的に回答した児童は 96.2%で全国平均より 1.8%高い。
- これまでに各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動をおこなったと肯定的に回答した児童は、88.5%で全国平均より 8.4%高い。

生徒質問紙

【基本的生活習慣・自尊感情等に関すること】

- 「朝食を毎日食べていますか」に対して 98.1%が肯定的回答をしている。(全国は 91.9%)
- いじめはどんな理由があってもいけないと肯定的に回答した生徒は、99.1%（全国は 96.4%）
- 「将来の夢や目標を持っていますか」に対して 71.4%が肯定的回答をしている。(全国は 67.3%)
- 地域行事に参加していると肯定的に回答した生徒は、69.5%（全国は 40.0%）

【学習習慣・授業等に関すること】

- 家で計画を立てて勉強している生徒は、75.2%で全国平均より 16.7%高い。
- 読書は好きであると肯定的に回答した生徒は、81.9%で全国平均より 13.7%高い。
- これまでに各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動をおこなったと肯定的に回答した生徒は、80.0%で全国平均より 12.6%高い。
- 「数学の勉強は好きですか」など数学の授業に関する内容で全国平均より低くなっているものが多い。
- コンピュータなどの I C T機器を週 3 回以上授業で使用した割合は 100%。(国：50.9%、県：47.0%)

2 玖珠町の児童・生徒質問紙の調査結果をふまえて

- 小・中学校において、授業に対して前向きに取り組もうとする姿勢の回答が多く、教職員の「新大分スタンダード」を中心にした授業改善の取組が児童・生徒に実感として伝わっている。
- 児童・生徒のほとんどが、基本的な生活習慣を身につけ、落ち着いた雰囲気の中で学校生活を送っていることが見てとれる。
- 自己肯定感（自己存在感）を持たせるために、授業や特別活動をはじめとして、学校の教育活動全体の中で、生徒指導の3機能を生かした取り組みの充実が必要である。また、家庭や地域との連携の充実を図ることによって、児童生徒の自己肯定感を高めていく必要がある。
- 家庭での時間の使い方について、児童生徒個々の実態を丁寧に把握し、家庭と連携しながら個別に指導することと併せて、学校挙げて家庭学習の習慣化や充実を図る取組（例：家庭学習の方法の指導、家庭学習の記録やチェックの工夫、計画的・意図的な家庭学習用の課題の提示、家庭学習強化週間の設定等）、また、1人1台のchromebookの授業での活用や持ち帰りも当たり前の光景となってきた。今後は、内容をより充実させることによって、家庭学習の質・量ともに向上させる必要がある。
- 学校における教育活動全体を通して、児童生徒個々の表現力を向上させる取組（例：表現する中身をもたせ、説明する場を設定した授業改善、行事等における表現の場の設定と丁寧な事前・事後指導等）を充実させること、また、互いの考えを聴き合い、認め合う学校・学級の風土を創り上げていくことによって、表現力の更なる向上を目指す必要がある。

【 玖 珠 町 】

令和4年度 全国学力・学習状況調査結果（学校質問紙）

1 調査結果の概要

小・中学校：学校質問

本町においては、小学校（6校）と中学校（1校）合わせて調査対象学校数が7校と少ないため、単純に全国平均・県平均の割合と比較して特徴を述べることは難しい面があるが、主なものとして以下の点があげられる。

- 全体的に見ると、肯定的な回答をした学校の割合が県・全国を上回っている項目が多い。
- 全小中学校が、ICT機器を活用した授業を積極的に行っている。また、中学校においては、Chromebookを毎日持ち帰らせて家庭での利用が進んでいる。
- 学校運営の状況や課題についても、全教職員間で共通理解をし、組織的な取組ができている。
- 全学校が、全国学力学習状況調査の分析結果を学校全体で教育活動を改善するために活用している。

2 玖珠町の学校質問紙調査の結果をふまえて

ほとんどの町内小・中学校全校が各質問に対して肯定的な回答をしていること等から、各学校で、組織的に取り組んでいることが見てとれる。

今後の主な課題は、

1 主体的・対話的で深い学びを意識した更なる授業改善

「新大分スタンダード」に基づく組織的な授業改善による授業の質の向上を目指し、児童・生徒自らが調べ、整理し、発表・交流する問題解決的な展開の授業を積極的に行う必要がある。また、1人1台のchromebookを含めたICT機器の効果的な活用をフロンティア校（塚脇小学校・くす星翔中学校）の取組を中心に充実させ、横展開させていく必要がある。

2 家庭学習の充実に向けた学校挙げての取組の強化

学校挙げて家庭学習の習慣化や充実を図る取組を行うことによって、家庭学習の質・量ともに向上させる必要がある。デジタル教材の利活用やクラウド環境下でのChromebookの持ち帰りによる家庭学習に充実を図る。

3 学校間の連携の強化（校種間連携協議会の深化・充実）

小中および小学校間の校種間連携を深め、9年間を通して共通して指導する内容の焦点化や有効な指導方法の共有等を行うことによって、教職員の更なる指導力の向上を図っていく。